

月刊

2013

7
月号

みんぱく

月刊みんぱく

平成二五年七月一日発行

第三七巻

第七号

(通巻第四三〇号)

(編集・発行)

国立民族学博物館

2013

7

特集

共生の雨林 アマゾン

生き物と人とのあらたな関係を探る 池谷和信

アマゾンの猿を追って 伊沢紘生

姿を消した魚ピラルク 大橋麻里子

コンゴウインコとオウギワシ 山口吉彦

カメの卵狩り 齋藤晃

自転車はどちらのカテゴリーに属するか——東西比較から

疋田 智

プロフィール
1966年宮崎県生まれ。TBSテレビ情報制作局プロデューサー。自ら「自転車ツーキニスト」を名乗り、自転車運動学の推進活動をおこなう。おもな著書に『だって、自転車しかないじゃない』（2013年）『自転車生活の愉しみ』（2007年。以上、朝日新聞出版）『自転車ツーキニスト』（光文社、2003年）など多数。

ドイツやオランダなど、欧州諸国で自転車の有り様を見ると、大抵の日本人は驚く。「こんなにたくさん自転車が！」「お婆さんなのに速いなあ」あるいは「自転車がデカイ顔してるなあ（クルマが道を譲ってるよ！）」と。

このところのエコ、健康（医療費削減）などの潮流もあって、欧州では自転車が本当によく使われるようになった。

遅ればせながら日本でも「自転車ブーム」などと言われつつあるが、なんの日本の「ブーム」など欧州の現状にはるかにおよばない。

つい最近、環境サミットが開かれたコペンハーゲンなどでも、本当に街中、至る所が自転車だらけ。自転車なしには市民生活が成り立たないのだ。

意外なことに、彼らは決して丁寧に運転しているわけじゃない。日本人の目から見ると、むしろ「暴走自転車」に見えるくらいだ。何しろスピードが速い。だが、自転車はある程度のスピードを得て「クルマの代替」にならなければ、エコとしての意味はないともいえる。自転車は空気清浄機ではないのだから。

それに、よく見ていると一見、暴走風に見えるが彼ら必ず守る鉄則がふたつある。ひとつは右側通行（つまりクルマと同じ方向）を厳守する

ことで、もうひとつは、決して歩道を走らないことだ。つまり、自転車は車両カテゴリーであるという原則がきちんと生きているわけだ。

ここが日本と違う。彼我の差を一言でいうなら、自転車を「車両」として認識しているか、あくまで「歩行者に毛の生えたもの」程度の認識か、という部分だろう。そもそも自転車が歩道を走ることが許されている国など日本しかないのだ。

そういう認識の中、残念なことだが、日本の自転車は現状に甘えずにいると思う。歩道を左右デタラメに走り、信号無視も、夜間無灯火も当たり前。あたかも自転車にルールなどないがごとく、傍若無人に今日も日本中を走り回っている。

その結果、この日本こそが先進国で自転車事故数、ダントツのワーストワンを記録している、ということをご存じだろうか。

本来はエコで健康的（医療費削減に効果があり）、渋滞知らず、経済的、と、いいことばかりの自転車のはずなのに、こと日本では、それが真つ当に活かされているとは言いがたい。

インフラの不備もさることながら、日本人は「自転車＝歩行者カテゴリー」という認識を一度考え直した方がいい。

1 エッセイ 千字文
自転車はどちらのカテゴリーに属するか——東西比較から
疋田 智

特集 共生の雨林 アマゾン

- 生き物と人とのあらたな関係を求めて——世界最大の森アマゾンの魅力 池谷 和信
- アマゾンの猿を追って 伊沢 紘生
- 姿を消した魚ピラルク 大橋 麻里子
- コンゴウインコとオウギワシ——野鳥を飼い、羽を利用する 山口 吉彦
- カメの卵狩り 齋藤 晃

- 似たモノさがし
羽根飾り
菅瀬 晶子

- みんなく Information

- 地球ミュージアム紀行
島の営みがつまった民俗資料館——沖繩・小浜島
加賀谷 真梨
- 多文化をあきなう
バナナの紙が仕事をつくる
津田 久美子
- フィールドで考える
魔女の結婚式
河西 瑛里子
- 人間学のキーワード
ジェンダー
宇田川 妙子
- 追悼
佐々木高明 元館長を偲ぶ
須藤 健一
- 制服の世界、世界の制服
修行としての僧衣
平井 京之介
- 次号予告・編集後記

特集

共生の雨林 アマゾン

アマゾンの森はじつに奥深い。

人跡未踏の獣の世界が今なお残り、動物たちが種の生存をかけてせめぎあう一方で、人と野生動物の領域が相互浸透し、「ほどよい」依存関係を築いているところもある。アマゾンの人びとは生き物とどのようにつきあひ、森や川の恵みをどのように利用してきたのか。企画展「アマゾンの生き物文化」では、極彩色の生物環境のなかで育まれた美意識を示す美しい品々が展示されている。本特集では、これらのモノが生まれた背景について考える。

住民が森の奥へ猟にむかう(2012年 撮影・池谷和信)



生き物と人とのあらたな関係を求めて —世界最大の森アマゾンの魅力—

奇妙な光景

わたしは、今から一〇年ほど前にアマゾン川の上流部エクアドルの奥地の村に滞在していた。そのときの奇妙な光景が忘れられない。家の外では、手足の長いクモザルが樹木から樹木へと移動していて、森に帰るわけでもない。住民がバナナをあげるのをみて、餌付けされているのを知る。日本のイノシシによく似たペッカリーは、日中に森から村を訪れては子供たちの遊び相手になっているが、夕方には森に帰っていく。室内ではウーリーモンキーが走りまわり、足に紐のないコンゴウインコは逃げることなく静かにとまっている。

アマゾン川は、地球上で最大の熱帯雨林が広がっていることでも知られている。その流域は、日本の約二〇倍の面積に匹敵しており、そこには世界のおよそ二〇三割の種を占める多様な鳥や魚が生きている。古代魚の形を残すピラルク、千種以上もあるナマズたち、重さが三〇キログラムを超えるネズミの仲間カピバラ、赤や青や黄色など色あざやかな羽を持つコンゴウインコなど、それぞれの種のなかで世界最大の大きさを誇っている。このほかにも、ナマケモノ、アリクイ、アルマジロなど、ほかの大陸にはみられないユニークな形の動物たちもいる。

生き物と人の「ほどよい関係」

アマゾンでの動物と人とのかわり方も興味深い。わたしは、これまで日本やアフリカやベーリング海に面する村に滞在して人と動物との関係を学ぶ機会があった。そこでの動物は、狩猟の対象であり肉や皮が利用されてきたが、現在では動物保護の考え方が外から浸透してきており、たとえ地域住民であっても商業目的の狩猟はすべて密猟になってしまった。ところがアマゾンでは、すべての地域というわけではないが、少なくともペルーアマゾンでは、現在年間二〇万頭近いペッカリーが合法的に狩猟されており、その肉や皮が販売されているのには驚いた。近くの町や都市で肉は消費されて、皮はイタリヤやドイツなどの海外に輸出されたあとに世界で最高級の手袋として加工されている。

さらに、アマゾンの人びとの暮らしのなかに、生き物に関する知恵を見つけることができる。アマゾンで最初に生まれたとされるハンモックは、野生のヤシの樹皮の繊維を利用したものである。冒頭で述べたような光景は、生まれたばかりの獣や鳥を人が獲得した場合に、それぞれの動物をペットのように飼育しながら動物と親しむアマゾンのな接し方をよく示している。足に紐をつけなくても鳥が逃げないのは、羽の一部を切って飛べなくしているためである。生え変わりの際に落ちた羽を、頭飾りに利用する。人びとは、野生を飼

池谷和信 民博 民族社会研究部

左：室内のコンゴウインコ(2001年)
右：ウーリーモンキーと人(2011年)





左：クモザル 右：フサオマキザル アマゾンのどのサルも好奇心が旺盛なのは、アジア・アフリカのサルと変わらない。わたしを値踏みし終わったあとは、わたしの一挙一動を観察しにやって来る(1995年)

樹上の覇者
広鼻猿類は、体重が一〇キログラムのクモザルやウーリーモンキー、七キログラムのホエザル、三キログラムのフサオマキザルやウアカリ、一キログラムのリスザルやヨザル、四〇〇グラムのタマリオンや三〇〇グラムのマーモセット、一二〇グラムのピグミーマーモセットなど、分類学上は一六属九〇種にわけられる。それら一種一種の樹上生活への馴染み方は、それぞれ異なる。しかし、すべての種に共通するのは、あまたいる熱帯雨林の樹上性や地上性の動物たちに対し、きわめて高圧的に振舞うことだ。

る。そうしてもなお、うっそうたる森のなかに、人の立ち入った形跡を見つけては驚愕する。わたしは人跡未踏の森を求めて、緑のじゅうたんをどれほど這いずり回るように旅したことが。広漠たる熱帯雨林に育まれたサルたち、広鼻猿類の、本来の生きざまを見つめたかったからだ。そうして、やっとたどり着いた昼なお暗い原始の森で、かれらの予想だにせぬ行動を目の当たりにし、啞然とする。
アマゾンを中心に、中南米の熱帯雨林に生息する広鼻猿類は、南米大陸とアフリカ大陸が分離して以降のおよそ四〇〇万年という長い時間、アジア・アフリカに棲むニホンザルやヒヒなど狹鼻猿類とは、たがいに隔離され、今日まで異なる進化の道筋を歩んできた。そして、広鼻猿類のそれは、熱帯雨林の樹上生活に馴染みきることだった。

また、三種のタマリオン三頭が、密な藪に向かって、三〇分もこの行動をとるのを見た。かれらが意気揚々と立ち去ったあと、藪のなかにオセロットを発見し、現地助手が銃で撃ち落とすと、胃袋から四頭のタマリオンが出てきた。
広鼻猿類の、襲われ捕食されてもなお、樹上の覇者然とした強気な振舞いは、原始の森でしか見られない光景である。わたしはその行動のなかに、広鼻猿類が歩んできた進化の軌跡と、かれらが獲得した高き誇りを見ていた。

その典型が、わたしを啞然とさせた、相手を徹底的に威し茶化し値踏みする行動である。木登り上手の恐ろしい捕食者、ネコ科のジャガーやピューマやオセロットに対しても、初めて見る得体の知れない動物、わたしに対しても、大声を張り上げ、敏捷に樹々を跳びはね、枝を揺すり、枯枝を落とす。しかも、小さいタマリオンやマーモセットだと、同じ森に棲む二種、三種が徒党を組み、協同してこの行動をとる。日本のリスほどのサルたちに取り囲まれ、頭上から金属音的な甲高い罵声を浴びせられ、枝々をこれ見よがしに揺すられる状況を想像してみたい。
ある時、地上に降りて、現地で塩場とよばれる所の土を採食中のクモザルが、ピューマに襲われるのを見た。クモザルは間髪、木に跳び移って難をのがれたが、その後から、引き上げるピューマを樹上から激しく威し茶化して、五〇〇メートルも追っていた。



アマゾンの猿を追って

伊沢 紘生

宮城のサル調査会会長

人跡未踏の森へ

世界最大の熱帯雨林アマゾン。その上空を双発の飛行機で低く飛ぶと、行けども果てぬ緑のじゅうたんに、これほどの大自然が今も地球上に存在していたのかと驚嘆する。

カヌーに外装エンジンを取り付けて大河を下り、無数の水路をたどって、人里遠く離れた支流を遡



双発の飛行機から見た緑のじゅうたん(1995年)



カヌーでの移動風景(2012年)

慣らして、生き物とのあいだに「ほどよい関係」をつくってきたのだ。
現在、アマゾン川流域のあちこちに木材伐採や石油採掘や道路建設などの開発の波が押し寄せてきており、秘境とよばれる場所も少なくなった。しかし、アマゾン全体をみると人の移動は今でも外装エンジン付きの小船や手漕ぎのカヌーが中心になっている。そして、ブラジルやエクアドルの辺境には現代文明と未接触の人類が暮らしているともいう。彼らは、どのようなかわりを生き物とのあいだにもっているのか知る由もない。

これらの一部を利用した装身具などを照らしあわせることで、アマゾンの自然と文化のきめ細かいかかわりを伝えている。アマゾンの人びとは、生き物の歯や骨やくちばしをいかにたくみに利用して首飾りをつくってきたのか、コンゴウインコやオウギワシやサギの羽根をいかに組み合わせさせてカラフルな頭飾りを儀礼用につくってきたのか、美に対する繊細な意識も知ることができよう。長さ三〇センチメートルを超えるおよそ二〇枚の尾羽からなる巨大な頭飾りをみたときに、これにはいったい何羽のインコが使われているのか、それらは野生であるのか飼いやられたものであるのか、展示場でじっくりと考えてみてほしいと思っている。



姿を消した魚ピラルク

おほしまりこ
大橋 麻里子

東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程、
日本学術振興会特別研究員

「ピラルクの骨は大きいねえ。村で三年ぶりに獲れたとき、ピラルクを食べた子どもたちは大はしゃぎだった。でかい鱗で覆われた丸い体には、不釣り合いな小さく平たい頭。その長さは一メートルを優に越えていた。ピラルクは世界最大の淡水魚といわれており、日本では高級観賞魚として知られている。

「骨ばかりの魚」

わたしはこれまで、アマゾン川の上流域に暮らす先住民シボの村に通ってきた。村の年配の男性によれば、昔は箒と弓矢をもって丸木舟に乗り込み、ピラルクが水面にある木の実を食べに来たときに位置を確認して、水中を泳いでいる影を狙って一突きしていたという。ピラルクを村にもち帰れば「腕がよい」と評されて、魚肉を他の村人に分配することは当たり前のことであり、妻に迎えたい女性の両親に丸々二匹



ピラルクをもち帰る人びと
(提供・Instituto de Investigaciones de la Amazonia Peruana)



市場で売られるピラルク、生身の販売はめずらしい(2012年)

のピラルクを進呈したこともあったそうだ。長さ四センチメートルを超える鱗は首飾りなどの装飾品として利用された。

一九八〇年代にアンデス高地や都市部からの出稼ぎ人が商業目的で刺し網漁をするようになると、ピラルクは一気に減少したという。現在では地元の人びとも刺し網を毎日仕掛けるが、ピラルクがかかることはめったにない。獲れる魚といえば最大で二〇〜三〇センチメートル程度の「骨ばかりの魚」であり、人びとは使用する網の目を年々小さくしている。

ピラルクの味

ある日三年ぶりに、近くの川にピラルクがあらわれた。それを見かけた隣村の男性が、自分の親族であり唯一ピラルク漁をおこなう村人のところ知らせにきた。彼は網目が大きい刺し網をもって、妻と子どもたちを連れて出漁し、二日目によく一尾の引き上げに成功した。

その家族はピラルクを食べたことがないわたしを食事に招待してくれた。こんがり焼かれた尾鰭には赤い斑点があり、むしろ食べるのを躊躇するぐらいグロテスクに思えた。でも一口食べると、トロツと脂が口のなかで広がった。「ほっぺが落ちる」というのはまさにこのことである。ピラルクの味にうっとりしていたわたし

の目の前で、男の子が「大きい」と言いながらかざしたその骨は、その子の顔幅を超える大きさだった。「骨ばかりの魚」で小骨と格闘しながら食べることに慣れていたわたしは、その白くて艶々の身を思い切り頬張った。

捕獲したピラルクの行方

久しぶりに捕れたピラルクだが、他の世帯にわけられることはなかった。解体後の魚肉は塩がまぶされてから天日干しされて干物になり、翌日には外装エンジン付きのボートで近隣の村に運ばれて売店の経営者に売られた。その後干物は、船で二時間ほど下ったプカルパ市の市

場に売店の主によってもち込まれて高値で取引されるそうだ。そういうわけで、ピラルクを捕獲した村人の手元に残ったのは、頭と鰭に加えて少しばかりの肉がついた骨だけだったのである。そして民芸品の材料となる鱗も、村人自身が買付人に販売するために、ひとまず自宅に保管されることになった。

どうやら、仕留めれば皆のあいだで「分かちあわれた」魚は、今では捕えた人がその利用を「独占する」魚となったようである。とはいえども、また村の子どもたちと一緒にあの大きな魚を頬張ることができればとついつい願ってしまうのである。

コングウインコとオウギワシ

野鳥を飼い、羽を利用する

美しい羽飾り

うっそうと茂ったアマゾンの熱帯雨林に住むインディオたちは、森の動植物資源を有効に活用し、独特の文化を創造し、長年にわたって継承してきた。特に彼らの羽を使った装身具は圧巻である。

普段は、半裸かヤシの葉で作った簡単な飾りをつけて生活しているインディオたちは、祭り

山口 吉彦

アマゾン民族館館長、アマゾン自然館館長



コングウインコとオウギワシの羽製頭飾り(シクリン族)

や儀式といった「ハレ」のときには、部族特有の羽製の装身具を身につける。

装身具は、単に身体を美しく飾って人の目を引く目的だけでなく、もっと深く複雑な社会的文化的意味ももっている。飾りに多く使われる羽は、権力や地位の象徴であり、呪力を増進する力もあると信じられている。

豪華絢爛たる羽製の頭飾りは、インディオにとって特に重要で、部族、階級、性別、儀式によって異なり、誇り高いステータスのシンボルと見なされている。

前ページの写真は、ブラジル領アマゾンにシグー川流域に住むシクリン族のカシケ（首長の頭飾り）で、コンゴウインコの赤い羽、スマレコンゴウインコの青い羽、それに強さを表わすオウギワシの黒褐色の羽を巧みに組み合わせて作っている。

コンゴウインコは体長一メートル、尾羽根は四〇センチメートル以上もある大型インコである。全体は鮮やかな深紅色をしていて、くちばしは厚く巨大で、見るからに壮麗で、光り輝く太陽の象徴として、インディオの神話にも良く登場する。



一方、オウギワシはアマゾン最大の猛禽類で体長一メートル、重さ四キログラムに達し、アマゾン地域の天界における生態系の頂点に立っている。

こうしたコンゴウインコやオウギワシの羽は別格で、豪華で風格があるために、カシケとよばれる首長やパジエといわれるシャマン、それに戦士のリーダーといったハイランクの人たちだけが儀礼の際に、そうした羽の装身具を身体に取り付ける特別の権利をもっている。

生かしたまま羽を確保する

ところで、羽製装身具の素材となる羽の確保にはふたつの方法がある。

ひとつは、ジャングルのなかで、弓矢を使って射る方法である。鳥打ちのための矢は、先が尖っていない団子のように丸い木製の矢で、当て身をくわらせて落とす、ペットにして飼っておき、羽を確保するやり方である。

もうひとつの方法は、鳥をひなのときから餌付けて飼いならすことである。まるで家族の一員のように人に良くなれる。羽が生え替わる時期に、インディオたちは落ちた羽を大切に保管して置き、それを使って美しい羽製装身具を作成する。

「鳥を生かしたまま飼って、その羽を頂く」といったことは、アマゾンインディオたちの森への思いやりと生活の知恵が表われている。「自然と人間との共生」の生き方ということが出来るだろう。

カメの卵狩り

齋藤晃 さいとう あき
民博 先端人類科学研究部



乾季の船旅
一九九〇年代中葉、ボリビア・アマゾンの上流域で一年半、フィールドワークをおこなった。インボロセクレとよばれる先住民居住区域を幾度も旅したが、乾季の船旅の楽しさはいまでも忘れられない。天候不順で蒸し暑い雨季に比べると、乾季は快適だし、なによりもたくさん動物をみることが出来る。多種多様な鳥のほか、サルやカピバラ、イルカのような哺乳類も豊富だが、いちばん目につくのはカメとワニだろう。前者については、地元の人には「ペタ」とよんでいるが、ナンベイヨコクビガメの一種である。水棲だが、乾季にはしばしば川から突き出た流木のうえに一列に並び、ひなたぼっこをしている。船のモーターの音を聞くと、まるでドミノ倒しのように、一匹ずつたばたと川に落ちていく。そのようすはなんともユーモラスである。

卵の収穫祭

わたしが一緒に暮らした先住民は、カメを食べることはないが、卵は食べる。川の水位がもつ

とも低くなる七月と八月はカメの産卵時期であり、卵狩りの季節である。南米の熱帯低地では、かつてカメの卵狩りは日本の秋の収穫祭のような一大イベントだった。一九世紀のヨーロッパの博物学者の記録によれば、カメの産卵場である川の砂州や川辺の砂浜に野営地が作られ、大勢の人びとが集まって、数日間、卵の「収穫」に興じた。そのようすをフンボルトはフランクフルトの大手にたとえている。ベイツによれば、卵狩りの解禁日は町の教会の扉に張り出され、産卵場では監督官が作業を監視した。また日没後、歌や踊りが何時間も繰り広げられた。

わたしが参加した卵狩りは、船旅の途中でおこなわれたものであり、参加者も多くはない。それでも、かつてのお祭り気分を十分味わうことができた。乾季には川の湾曲部の内側に砂浜が出現するが、カメはそこに卵を産みつける。われわれはその砂浜のひとつひとつに立ち寄り、できるかぎりの卵をかき集めた。巣が新しくれば、砂浜の表面の痕跡から見わけられることもできるが、より確実な方法は、かかとで砂浜を踏みつけることである。砂浜がへこめば、そこに巣がある。ひとつの巣には三〇個から五〇個ほどの卵がある。卵はピンポン球ぐらいの大きさで、柔らかな殻でおおわれている。われわれは午前中いっぱい卵狩りに熱中し、船は卵だらけになった。たぶん数千単位の卵が集まったと思う。これらの卵は、そのままゆでるか、厚手の卵焼きに調理して、すべて平らげた。

カメの減少

かつて南米の熱帯低地の川はカメであふれていた。一八世紀のカトリックの宣教師グミリヤは、浜辺の砂の数ほどカメがおり、放っておけば川は航行不能になるだろう、といっている。しかしいまや、カメは絶滅が危惧されている。この減少にはさまざまな要因が絡んでいる。ところが、卵からとれる油の商取引が大きな影響を与えたことは十分ありうる。都市の発達に伴う灯油や調理油の需要の増大が、商取引を活発化させ、卵の乱獲を引き起こしたのかもしれない。さいわい、この商取引は下火になったが、蚊が空中を満たすようにカメが水中を満たしていた風景は、もう戻ってこないだろう。



オウギワシを抱くアラウエテ族の男性(1970年代後半)



屋根の上のコンゴウインコ。アラウエテ族の住居にて(1970年代後半)



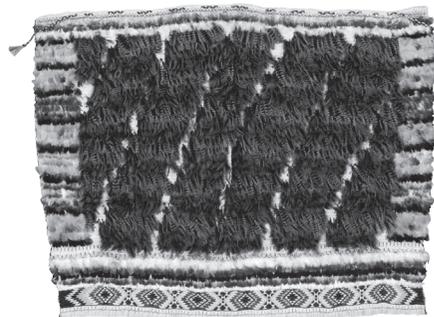
水辺にいるヨコクビガメ(ブルー、ロレト州 2012年 撮影・池谷和信)



5



3



1



6



4



8



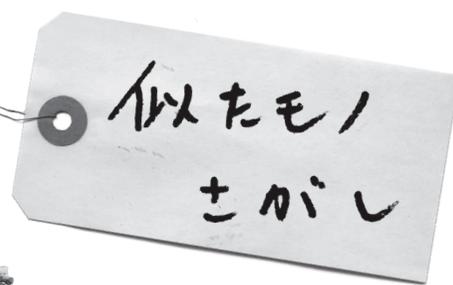
9



7



2



似てるけどどこか違う
似てないようでどこか似てる
いろんな工夫や思いを映す
みんぱくの所蔵資料

羽根飾り

菅瀬 晶子 民博 研究戦略センター

羽根飾りといえば、思い出すのはシ
ラノ・ド・ベルジュラック。月世界旅
行を夢見た実在の奇人を、劇作家エド
モン・ロスタンはすぐれた詩人にして
義侠心に富む剣豪、されど巨大な鼻を
恥じるがゆえに、従妹への恋を胸に秘
めたまま生きる、究極のプラトニック・
ラブの主人公に生まれ変わらせた。反
骨の精神ゆえに命を落とす彼が、死出
の旅路の道連れに、ただひとつ望むも
の。それが「わたしの羽根飾り」である。
原文のフランス語 *mon parachute* の直訳
であるが、辰野隆と鈴木信太郎による
日本語訳では「羽根飾り」「こころいき」
と振り仮名が振ってあるところが心憎
い。一七世紀の騎士たちの帽子を飾っ
たダチヨウの羽根飾りは、まさに彼ら
の伊達な心意気の象徴であったのだ。

さまざまな色彩を帯びた、美しい鳥
の羽根。それで身を飾るといふ行為は、
単におしゃれ「こころや心意気を示した
めだけのものではない。めずらしいも
のは、すなわち富と権力の象徴である。
洋の東西を問わず、ありとあらゆる権
力者たちは、その力を誇示するために、
羽根を身に付けてきた①②。ときには
貨幣そのものとしてもちいられること
もあり③、いかに羽根が珍重されてき
たのかがわかるであろう。また、本来
羽根は、風を切り空を飛ぶためのもの
である。それゆえ、武器や遊具にも多
用されてきた④⑤。

さらに忘れてはならないのは、鳥の
羽根が超自然的な力と常に結びついて
きたという点である。境界をやすやす
と飛び越える鳥は、異界からのメッセン
ジャーであると考えられてきた。それ
ゆえ、人びとは鳥の羽根を異界との交
信にもちい⑥、シャマンたちはこぞって
羽根を身に着けた⑦。彼らが交信する
精霊もまた、しばしば羽根をもちいて
表現されている⑧⑨。
さて、そんな色とりどりの羽根を供
給してくれる鳥たちも、いまや産地のア
マゾンやオセアニアだけではなく、全世
界で飼われている。じつはわが家にもイ
ンコがおり、シラノのごとく、生気
に飾り羽根を額につけている。たまに生え
変わりでこの羽根を落とすことになるだ
が、クジャクの羽根ですら一本五〇〇円
のごとき時世、ありふれたペットの羽根
では王侯貴族のコレクションにも、魔除
けにもなりそうにない。わずかに飼主
の愛着を満たしてくれるのみである。

- ① マント、ニュージーランド（民族：マオリ）、
幅 122×高さ 97cm、H0217387
- ② 葬儀長用衣装（復原）、フランス領ポリネシア
ソサエティ諸島、H0229161～H0229172
- ③ 羽毛貨、ソロモン諸島 サンタ・クルーズ諸島、
H0086151
ミツスイという赤い小鳥の羽根を木皮の表
面にはりつけてコイル状にしたもの。
- ④ 槍、バブアニューギニア、H0002377
幅 21×厚み 8.0×長さ 254 cm
- ⑤ 蹴り羽根、チベット、
幅 10×奥行 9.0×高さ 5.5cm、K0004686
- ⑥ 星祭りのポール、オーストラリア、
幅 5.8×高さ 164cm、H0085809
- ⑦ シャマンの帽子、ロシア連邦 シベリア
（民族：トゥバ）、H0088423
- ⑧ ニャウの仮面、ザンビア（民族：チェワ）、
幅 81×奥行 53×高さ 59cm、H0168003
地上に残る死者の魂の化身とされるニワト
リかホロホロ鳥の羽根のみを使用する。本
品はニワトリの羽根を使用。
- ⑨ カチーナ人形、アメリカ（民族：ホビ）、
H0085659

企画展

「アマゾンの生き物文化」

野生のサルや鳥などをペットにして飼い慣らすなど、地球最大の熱帯林を持つアマゾンの生き物と人とのかかわりを紹介します。

会期 8月13日(火)まで
会場 企画展示場A

■関連イベント

◆ギャラリートーク

13日(土) 中川哲男 (天王寺動物園 元園長)
14日(日) 池谷和信 (民博 教授)
27日(土) 山口吉彦 (アマゾン民族館 館長)
28日(日) 小宮輝之 (上野動物園 元園長)

【8月】

3日(土) 中牧弘允 (吹田市立博物館 館長)
10日(土)・11日(日) 池谷和信 (民博 教授)
各日 13時～13時30分
会場 企画展示場A

※申込不要、参加無料、要観覧料

◆ワークショップ

◆夏のアマゾン探検隊

夏の自由研究はこれで解決！企画展「アマゾンの生き物文化」の展示場を熱帯雨林に見立てて探検し、フィールドワークに挑戦します。

日時 7月26日(金) 10時30分～16時
(受付10時から)
対象 小学4年生～6年生
※事前申込制(先着20名)、参加費500円
お申し込み・お問い合わせ先
情報企画課「夏のごもワークショップ」係
workshop@idc.minpaku.ac.jp

◆トークイベント

◆「鳥の羽根 いろいろどい」

館内・館外の研究者が、世界の鳥の羽根についてお話しします。

日時 7月27日(土) 14時～16時
場所 本館展示場(ナビひろば)

企画展

「武器をアートに」

モザンビークでは、内戦終結後に回収した武器でアートの作品を作り出すという事業が進んでいます。アートを通じて平和を築く営みを紹介いたします。

会期 7月11日(木)～11月5日(火)
会場 企画展示場B

■関連イベント

◆国際ワークショップ

「武器をアートに」モザンビークにおける平和構築の営みを考える」

日時 7月13日(土) 13時30分～16時30分
会場 本館第4セミナー室

みんなくワールドシネマ

「ごめ帰ろつ、ペダルをこいで」

共産党政権下から民主化へ、時代の波に翻弄され、引き裂かれたブルガリア人の祖父と孫の再会を通して、家族の在り方とその未来を皆さんとともに考えていきたいと思います。

日時 7月13日(土) 13時30分～16時30分
(開場13時)
会場 講堂(先着450名)
※申込不要、参加無料
※当日10時から講堂入口にて整理券を配布

研究フォーラム

「金融のなかの贈与——金融と人類学の交差点」

日時 7月14日(日) 10時30分～16時15分
会場 本館第4セミナー室(定員70名)
※申込不要、参加無料

博学連携教員研修ワークショップ2013 in みんなく
「学校と博物館をつくる国際理解教育——センセイもつくる・あそぶ・おどる・たのしむ」
本館を活用した国際理解教育の実践事例の紹介やワークショップを通して、国際理解教育における博学連携の意義や可能性について考えます。

日時 8月6日(火) 10時20分～17時

みんなくはなミナール

会場 国立民族学博物館 講堂

時間 13時30分～15時(13時開場)

定員 450名(当日先着順)

参加費 無料(展示をご覧になる方は、観覧料が必要です)

第422回 7月20日(土)

「新日本の文化展示関連」

色を創る、音で伝える、心に触れる——「警女がみた風景」

講師 広瀬浩二郎(国立民族学博物館 准教授)

警女とは、三味線を携え全国各地を旅した盲目の女性芸能者です。21世紀の今日、警女は消え、その存在を知る人も少なくなりました。視覚優位の現代社会にあつて



警女文化はどんな意味を持つのでしょうか。警女唄の録音資料を紹介しつつ、色・音・心をキーワードに、警女文化の可能性を考えます。

第423回 8月17日(土)

「新日本の文化展示関連」

「つくりもの——ハレのかたち・おもしろいかたち」

講師 笹原亮二(国立民族学博物館 教授)

西岡陽子(大阪芸術大学 教授)

福原敏男(武蔵大学 教授)



祭りや年中行事などのハレの機会に、様々な趣向を凝らした造形物を見物に供する「つくりもの」が、西日本を中心に各地で見られます。各地では、人々はおもしろいかたちを作ることを楽しみ、それを人々が見物に集まってくる魅力について考えます。

友の会

友の会講演会(大阪)

会場 国立民族学博物館 第5セミナー室

定員 96名(当日先着順、会員登録必須)

第422回 8月3日(土) 14時～15時

「新日本の文化展示関連」

日本の森とミツバチと人

講師 池谷和信(国立民族学博物館 教授)

日本の文化展示では、長崎県対馬を事例にして現在の日本の養蜂を新しく紹介しています。対馬では大木をくりぬいて作るハチドウを用いた伝統的な方法で、野生のニホンミツバチから蜜を集めています。蜂の来訪を待つだけでなく、群れを誘導したり巣を移植したりもします。日本の里山のしくみに養蜂がいかに結びついているのか、世界各地の養蜂の事例と比較しながらお話しします。

第423回 9月7日(土) 14時～15時

「みんなくコレクションを語る」

カチーナ人形の作り手たち

講師 伊藤敦規(国立民族学博物館 助教)

カチーナ人形はアメリカ先住民のホビの人びとが儀礼で用いる木製の人形です。みんなくは1980年前後に283点を収集しましたが、資料情報がたいへん限られている状態です。人形の台座に記されたサインを手がかりに、制作者本人や親族を探し出すことができたので、将来的にはインタビュー調査を行う予定です。人形資料を紹介した「もの語り」の可能性についてお話しします。

第67回体験セミナー

ニッポンの漆を考える

世界最古の漆発見の地・鳥浜貝塚と越前漆器

10月26日(土)～27日(日)

講師 日高真吾(国立民族学博物館 准教授)

訪問先 若狭三方縄文博物館(福井県三方町)、片山漆器神社(鯖江市) ほか

※詳細は「友の会」までお尋ねください。
体験会員(登録3000円)としてご参加いただくことも可能です。

国立民族学博物館 ミュージアム・ショップ

電話 06-6876-3112
FAX 06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp
水曜日定休

ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/

企画展「アマゾンの生き物文化」関連
フェアトレード商品「カムカムドリンク」

いま開催中の企画展「アマゾンの生き物文化」で展示されている「カムカムドリンク」。カムカムとは、南米ペルーのアマゾン川流域の水辺や湖沼に自生する果物です。その果実には、レモンの56倍、アセロラの1.7倍のビタミンCが含まれています。東京農業大学がこの果実を使ってフェアトレード商品として開発し、同大学内のベンチャー企業が販売するのが「カムカムドリンク」です。ミュージアム・ショップでは、これまでもひろくフェアトレード商品を扱ってきましたが、企画展の開催に合わせ、この大学発のフェアトレード商品もあつかっています。企画展をご覧いただくとともに、アマゾンの恵みがつまった甘酸っぱいドリンクを味わってみてください。



カムカムドリンク 190g 120円(税込)

(受付10時から)

会場 講堂およびセミナー室、本館展示場内

※参加無料(事前申込制、当日参加可)

お申し込み・お問い合わせ先

情報企画課 FAX 06-6878-8242

●日本展示学会賞受賞作品賞受賞

本館展示新構築「アフリカ」「西アジア」及び特別展「ウメサオタタオ展」が日本展示学会第4期学賞受賞作品賞を受賞しました。

※各イベントについて詳しくはホームページをご覧ください。

※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時から17時(土日祝を除く)です。

■上羽陽子 監修

『世界のかわいい民族衣装』

誠文堂新光社 定価：1,890円

民博の膨大な資料の中から「かわいい」をキーワードにセレクトした44の国と地域の約65種類の衣装を掲載。地域によって異なる美しい民族衣装のデザインや様々な手法で作られた刺繍、織物、染色などの細部までたくさんの写真とともに堪能できる。民博教員によるコラムも掲載。



刊行物紹介

■鈴木紀・滝村卓司 著

『みんなく 実践人類学シリーズ 8 国際開発と協働——NGOの役割とジェンダーの視点』

明石書店 定価：5,250円



協働とは、公共サービスの分野で異なる主体が協力することです。本書は国際開発におけるNGO活動と「ジェンダーと開発」分野での実践に焦点をあてた論考を収録し、協働の実態やその課題を明らかにします。

島の営みがつまつた民俗資料館

— 沖繩・小浜島

八重山諸島のいくつかの島には、地元住民によって開設された私設の民俗資料館がある。そこには、島の今と昔の暮らしがギュッとつまっている。



過去と現在を橋渡しする秘策

一〇の有人島からなる沖縄県八重山諸島には、博物館の原型ともいえる私設の民俗資料館が点在している。石垣島の南嶋民俗資料館、竹富島の喜宝院蒐集館、小浜島の小浜民俗資料館、与那国島の与那国民俗資料館がそれである。日本の近代型博物館が明治の転換期において教養豊かな市民へと国民を啓蒙する目的で創設されたのに対し、八重山諸島のこれらの資料館は、戦後の激動する時代に対する戸惑いや島の将来に対する不安感を背景に、自分たちの歩んできた歴史・民俗を再現し保護する目的で開設されたという点で、同じモノの展示空間といえどもそのベクトルは大きく異なる。

八重山諸島の中心に位置する人口およそ五〇〇人の小浜島に佇む小浜民俗資料館もそうした私設資料館のひとつだ。同館は教員を定年退職して帰郷した慶田盛正光氏の手により、「生きた学習の場、そして語らいの場、文化の伝承の場、ふるさと再発見の場、そして新しい活力を生み出す場にした」との願いで一九八七年七月に開設された。だが、現在まで秘祭が執りおこなわれ、門外不出の民俗事象が多いこの島での開設はそう容易ではなかったことが推察される。そうした特殊な事情を押してまで資料館開設に動いた背景に、島の文化的窮状に対する強い危機感があった。当時の小浜島は、島の四分の一の土地に本土資本のリゾートホテルが開業し、観光化の只中。復帰前後からリゾート開発に異を唱えていた正光氏にとって、資料館の開設は過去と現在の橋渡しをし、島の変貌に抗するための秘策であったといえよう。小浜資料館はそうした島への熱い思いが凝縮して創出された場所なのである。

私設資料館の醍醐味

夏には一日二〇名前後の観光客が訪れる館内には、農具、民具、衣装、調度品、仮面、儀礼の写真、屋判の一覧表等約三〇〇点が展示されている。その多くは館長やその親族が使用してきたもので、現館長が館内で愛用している「木の枕」もかつてその母親が使用し、今日その製作は困難な貴重な品だ。だが、展示品ひとつひとつにそうした解説が添えられているわけでもなく、パンフレットが用意されているわけでもない。お膳立てされた博物館に慣れている訪問者にとっては驚きを禁じえないであろう。しかし、そうした驚きはグツと呑み込んで頂きたい。なぜなら、私設資料館の魅力はそこで来客者を持つ館長その人にあるからだ。彼らは島の歴史の代弁者でも文化の翻訳者でもなく、島の歴史や文化そのものである。それゆえ、館長が訪問時におこなっている作業に島の営みを感じし、あるいはその手を休めて説明してくれる、モノをめぐる記憶や経験から島の歴史を伺い知ることに私設資料館の醍醐味がある。

機を織り、来館者を持つ

小浜民俗資料館の扉を開けてまず目にするのは、正光氏の亡き後、館長として館を切り盛りしている妻の英子さんが機織りをしている姿であろう。彼女は館内に織機を五台設置し、時間が許す限りそこで機織りをしている。彼女が制作しているのは親戚の着物である。「行事の島」と評されるほど年中行事が盛んなこの島では、着物を身につけていなくては行事に参加できず、とりわけ男性の参加にはクンズンと称する限りなく黒に近い藍色の着物をつけることが必要不可欠である。女の手によって染められ、女の手によって織られた着物。それが、島を離れて暮らす子どもや孫を島に繋ぎ留め、秘祭を含めた年中行事の維持存続に一役かかっていることはいまでもない。館長自身も「織りだけはよその島ではできない」と自負し、一夏に五、六反を織り上げる。祖先がおこなってきた営みを受けとめ、自らの人生をそこに重ね合わせている英子さんの姿に、小浜島の人びとの今のくらしの縮図を見てとれよう。

この夏、もしも八重山諸島を訪れる機会があれば、是非とも私設の資料館に足を運び、島を愛する館長と話をし、その人となりに触れて欲しい。彼らの人生とモノとが交錯した話に、今まで見えなかった島の別の姿が立ち現れてくるはずだ。そして、時間が許す限り、島ごとに個性豊かな彼らが誇る年中行事を見て頂きたい。きっと、あなたも立派な「八重山フリーク」になること間違いない。

加賀谷 真梨
民博 機関研究員



秋におこなわれる結願祭(ケツガンサイ)。手前に座る男性らが身につけているのがクンズンである



機織りをする現館長の英子さん



盆行事のようす。子どもから大人まで島の女が織った着物を身につける



資料館に展示されている着物。行事や年齢、性別によって着るべき着物が定められている



アサイ(民家の離れ)を利用した民俗資料館

バナナの紙が仕事をつくる

津田久美子

特定非営利活動法人ハーベストタイム代表

美味しいコーヒーの二杯で、アフリカ農民支援を。
ハーベストタイムは、東アフリカで生産されたフェアトレード・コーヒーの販売によって、
現地の人びとの生活・教育環境の支援をおこなっている。
その一方で、コーヒーのような換金作物をもたない人びとの雇用創出のために、
ルワンダではじめたのは、バナナの繊維を利用した紙作りであった。

エチオピアのコーヒー危機

二〇〇〇年ごろから世界のコーヒーの生豆価格が大暴落し、コーヒー豆が輸出収益の半分以上を占めるエチオピアは国家存亡の危機に直面した。当時、駐日エチオピア大使館に勤務していたわたしは、農民がコーヒー生産を放棄して都市に流入するさまを目の当たりにした。そこで、コーヒーをとおして何か支援できないかとの思いから二〇〇五年NPO法人ハーベストタイム(HAT)を設立した。東アフリカのコーヒー栽培地を訪問し、日本の消費者に現地状況を紹介するとともに、フェアトレード・コーヒーの販売を通じて、農民の生活・教育環境の向上をはかることを目指した。

二〇〇六年、エチオピア最大のコーヒー農協の代表タデッセ・メスケラ氏の紹介で、同国南部のコーヒー産地イルガチエフェを訪問した。農民は代々コーヒーの樹に覆われた山地に住んでコーヒー生産を続けているが、水道、電気などの生活インフラ

は皆無だった。また作物の運搬手段は専ら人力であり、腰を曲げて大きな荷物を担ぐ女性たちが多く見られた。しかも、事務所で「農協産コーヒー・リスト」を見せてもらうと、フェアトレードとして有利な条件で売れるコーヒーは、生産量のほんの一部に過ぎないことがわかった。これらの状況から、HATは農民へより直接的な支援に取り組み必要を強く意識した。

松戸の放置自転車をアフリカへ

帰国後、千葉県松戸市(HAT事務所所在)に「放置自転車を、エチオピア農民の生活・生産向上のため運搬手段として活用したい」と要請した。市側は、自転車一三台を整備して無償提供し、HATは、エチオピアへのコンテナ運搬費用をコーヒー販売収益から充当して、現地二箇所への贈与が実現した。同様に、二〇〇九年には、マラウイのコーヒー生産地域の小学校や孤児院へ一〇三台

の自転車と、ソーラーLEDライト五〇台、文房具等を贈与した。
しかし、これらの活動をとおして見えてきたのは、受益者である農民に「今度は何を？」との期待感を抱かせ、依存度を高めてしまう危惧である。事実エチオピアでの贈与式で、現地NGOスタッフから「今度はバイクを！」との言葉が聞かれた。改めて、農民自らの「経済的自立」を支援する方法の模索が続いた。

バナナ・ペーパーで雇用創出を目指す

近年アフリカ各国では、都市と地方との貧富の格差が増大している。地方には雇用機会が殆ど無く、細々と自給自足の生活を強いられるため、青年の都市部への流入は大きな問題となっている。二〇〇八、二〇〇九年と訪問したルワンダは、一九九四年のジェノサイド(民族虐殺事件)以降、コーヒー産業はアメリカ政府の資金・技術支援を受け、国家経済の中心的産業へと成長していた。一方で、換金作物をもたない農民は、経済成長から大きく取り残され、その明暗は際立っていた。

贈与による支援ではなく、雇用の機会を創出した。特に換金作物をもたない農民やジェノサイドで夫を失った女性たちも働ける機会をつくりたいとの思いに至り、ルワンダ各地に群生するバナナの木を見て、実の収穫後に捨てられる幹を使ったバナナ・ペーパーの生産を思いついた。日本に戻ってすぐに数か所の和紙の里で製紙技術を学んだが、「バナナ繊維は大変固く機械(ビーター)や薬品を使わなければ難しい」ことがわかった。それでもフィリピン産

バナナ繊維を用いて、自宅で何度も試行錯誤を繰り返した。岩手在住の紙漉き師、相澤征雄氏に相談したところ、氏はバナナの幹を取り寄せ研究・解決に取り組んでくださり、化学薬品、高度な機械設備に頼らない、完全手作業による環境重視の「バナナ・エコペーパー」の生産工程を完成させることができた。二〇一一年九月ルワンダのJICA(国際協力機構)事務所の紹介で、キブンゴ手工芸品販売協同組合と協議した。その結果、同敷地内に同年一二月に「HAT工房」が完成し、市長を招いて開所式がおこなわれた。工房で使用する道具や備品類、現地で入手困難な大きなステンレスの寸胴鍋など、すべて日本からもち込み生産体制を整えた。二〇一二年より青年海外協力隊員の協力もえてカード類の生産を開始し、HATがフェアトレードで買い取り、日本での販売が実現した。今後はルワンダ国内で需要が高いと思われるバナナ・ペーパーのクラフト製品をより多く開発・製造し、現地マーケットでの流通を促すことで、農民の就労機会の拡大を着実にすすめたいと考えている。

このようにHATは、東アフリカのコーヒー生産地を訪ね、フェアトレード・コーヒーの販売を基盤に、コーヒーなど作物の運搬手段として再生自転車を贈与したり、換金作物をもたない農民の雇用創出のためにバナナ・ペーパーの生産を展開してきた。これからも変貌著しいアフリカを訪ねて見えてくる農民の姿から、生活の向上および教育支援を軸とした手作り支援を、そして彼ら自身の手で育て発展させ得る可能性を秘めた、持続可能な支援を模索し続けていきたい。



HAT工房開所式でキブンゴ市長に説明(2011年、ルワンダ)



バナナ・ペーパーで作ったランプシェード(2013年、ルワンダ)



キブンゴのHAT工房入口に立つ筆者(2012年、ルワンダ)



シャシエメネ地域での自転車贈与式(2007年、エチオピア)



ルラ公立小学校に学用品をプレゼント(2008年、マラウイ)



薪(まき)を運ぶ母子(2006年、エチオピア)

魔女の結婚式

河西 瑛里子 民博外来研究員

ほうきに願いを

このほうきに乗って、空を飛べないかな。そう願って、学校の掃除の時間にほうきにまたがって遊んだことはないだろうか。三分の一ぐらいの読者は今、心のなかでうなずいていると思う。

ハリ・ポッターや魔女の宅急便の世界で描かれてきたように、魔女にとってほうきは空を飛ぶための必須アイテムというイメージがある。しかし、現代を生きる魔女たちは、もう少し現実的で、そしてロマンチックな場面で利用している。

二世紀の魔女

そう、現代にも「魔女」はいるのだ。現代のイギリスの魔女は、魔女狩りのころに共同体から排除された魔女や、占い師として大々的に活躍しているルーマニアの魔女とは異なる。旧ソ連崩壊以後に伝統文化復興の一環として盛んになってきたバルト三国や、右翼とのつながり

終わりに近づいたころ。ほうき係の二人が、ハドルぐらいいの高さまで恭しくほうきをもちあげる。「こんなの跳べないよ……」と困惑するカップルに、「失敗したら、結婚できないわよ」と容赦ない司会者。顔を見合わせて意を決したカップルは、助走をつけて跳び越える、とその瞬間、ほうきがさつと下げられ、呆気なく成功。「結婚は無事に成立しました」と司会者が宣言し、会場は笑いと拍手に包まれる。

ありきたりなんてつまらない

このハンドファステイング。じつは最近、イギリ



出番が来るのを待つほうき

が強いスカンジナビア諸国などの、愛国主義的な動きとも異なる。集団で儀式をすることを重視する人もいるし、友達にお守りや葉草をわけてあげ

ることを魔女の実践と考えている人もいる。宗教と捉えている人もいるし、ヨーロッパの民間療法を受け継いでいると考えている人もいる。「魔女の数だけ、魔女の種類がある」といわれるように、何を魔女とみなすのかに定義はないので、輪郭をつかみづらい。あえて共通点を挙げれば、多くの魔女は、地水火風の四要素、女神と男神を敬っている点だろう。またもうひとつ挙げると、キリスト教が広まる前のヨーロッパで信仰されていた、多神教で自然崇拜を特徴とする宗教実践の復興運動としてみなされることが多い点である。

とはいえ、現代の魔女たちはほうきで空を飛んだりはいしない。しかし、ほうきを跳んでいる。

ハンドファステイング

スでささやかなブームらしい。

ある魔女からの話だ。

「ヴァージン・ロードを歩かなくていいからね。子どももいるのに『ヴァージン・ロード』なんておかしいでしょ。イギリスではね、子どもを連れて再婚する人や、長いあいだ同棲してから結婚する人がとても多いから、教会のヴァージン・ロードを歩く花嫁さんの大半は処女とはいえないでしょ」なるほどと真顔でうなずくと、にやりと返された。どうやらイングリッシュ・ジョークだったらしい。もう一度、説明しなおしてくれた。

「キリスト教風の結婚式って、型通りでとても



ろうそくや紫水晶など、地水火風をあらわすものであふれる祭壇

花やリボンで彩られた、ブーケのようなほうき。二〇〇八年の七月、イギリス南西部のサマーセツト州でおこなわれたある結婚式で、それは静かに出番を待っていた。

この地方の夏は、鬱々とした冬とは対照的に、日が長く青空が広がり健康的だ。「ハンドファステイング」にはもってこいの季節である。魔女たちは結婚式のことをキリスト教のイメージがするウェディングではなく、式中にカップルの両手を紐でぐるぐる縛ることにちなんでハンドファステイング（手を結ぶ）とよんでいる。

式場は農家の庭先。祭壇の前に立つカップルを参列者が取り囲み、司会の女性が四要素と女神と男神を呼び出すところから始まる。集まっているのはカップルの家族以外、ほとんどが魔女たちだ。指輪の交換や誓いの言葉が続ぎ、男女の性的な結合の象徴的な演出として、新郎が掲げもつ杯に新婦が短剣を突きさす。ほうきの出番は式も

退屈でしょ。だから、少し変わった結婚式をあげたいカップルに人気のよ」

そういえば日本でもキリスト教風の式が一般的になってしまった今、かえって神道スタイルの式を選ぶカップルが増えてきているときく。そこで、変わった結婚式をあげたいあなたに、ハンドファステイングも選択肢のひとつとして勧めたい。記念にもらえるほうきに帰国便の機内でまたがれば、子どもの夢もちょっと叶うし、一挙両得である。



ほうきをとびこえる。「結婚」めざして、2人でえいっ!

ジェンダーとは、性の生物学的な側面（セックス）に対して、社会文化的に作られた性を意味する。このことばはいまでは一般でも知られるようになってきているが、その一方で、アカデミズムの内外を問わず、さまざまな立場からの論争は絶えない。

なかでも最大の論点は、性差はどこまで社会文化的に作られているかである。とくに妊娠・出産という生物学の特徴によって、男女は本質的に区別されるという見方は根強い。たとえばジェンダー・フリーということがしばしば物議を醸すのは、それが男女の違いをすべて社会文化的な産物とみなし、性差の撤廃は可能であるという主張に見えるからだろう。

しかし、世界を見渡すと、そうした身体の差違でさえ、社会文化によって認識のされ方が違うことがわかる。たとえばニューギニアには、男女の違いを生殖器ではなく体液によって判定する社会がある。そこでは女性は、月経や母乳などが豊富な時期に女性とみなされるのであって、閉経後は男性に近くなり、男性の領域にも出入りが可能になる。一方、子どもは母の体液にまみれて生まれてくるので、男子も生まれたときには女性的に扱われる。しかし、成人式のときに身体を傷つけて血を流し、それまでの女性的な体液を外に出したり、他の成人男性の精液などをこすりつけ、男性的な体液を体に取り込んだりして、男性の体液が増えると男性になる。そして、結婚して妻との性交渉をおして精液などが減少するにしたがって、次第に女性的になるとされている。

ジェンダー Gender

宇田川 妙子 うだがわ たえこ 民博 民族社会研究部

いまさら聞けない
人間学の
キーワード

たしかに妊娠・出産は、普遍的に女性の身体的機能である。しかしそれは、わたしたちの社会においても、女性の生活や人生の一部でしかない。そうした生物学的な特徴を、どのように認識し、利用し、強調あるいは軽視するかは、やはり社会文化によって異なるし、歴史的にも変化する。

そもそもジェンダーという視点には、男性や女性にかんする議論にとどまらない可能性がある。かつて人類学でも、ある社会や民族を考察する際には、事実上、その社会の男性たちを念頭に置いていた。女性たちは、人類学者アードナーが指摘したように、外部の研究者のみならず内部の男性、さらには女性たち自身によっても「沈黙させられ」、見えづらくなっていた。ゆえに、ジェンダーという視点から浮かび上がってきたのは、女性たちの姿や声だけでなく、社会というものが、そうした女性たちをはじめとするさまざまな人たちの存在を含んでいるという現実である。しかも、同じ女性同士であっても、もちろん男性同士でも、年齢、世代、階層などによって違いがある。そして一人の女性にも男性にも、複数の顔がある。つまりジェンダーとは、わたしたちの社会がじつはさまざまな差異に満ち、だからこそダイナミックな豊かさを宿していることに気づきつけかけのひとつなのである。

にもかかわらず、社会がしばしば同質的なものとみなされてしまうのはなぜなのか、そこにはどんな力がかかわっているのか、わたしたちはこれからも考え続けていく必要があるだろう。

佐々木高明 元館長を偲ぶ

二〇一三年四月四日ご逝去 享年八三

須藤健一 民博館長

佐々木高明先生の訃報を耳にしたのは四月のはじめ。昨年九月の特別展の開幕式でお会いしたときにはお顔の色もよく、「漢方がよく合う」と言われて民博よもやま話に花がさいたのに残念でならない。

一九九三年に第二代館長になられた佐々木先生は、それまでの二〇年間「梅棹みんぱく」の真の牽引者として博物館を完成させた民博のご先祖様である。予算折衝で文部省（当時）に出かけるとき、「梅棹さんが道をつけてあるから」と先生はよく口にされた。じつは、官僚との丁々発止の議論で功を奏したのは、佐々木先生の用意周到な説得力であったようだ。

また、民博という新しく無名の文化人類学の研究所の存在を国内外に知らしめたのも佐々木先生の力による。開館の翌年（一九七八年）から二〇年間、特別研究「日本民族文化の源流の比較研究」などを組織された。内外の著名な研究者を招いて数日間にわたり議論を戦わせ、その成果をすぐに刊行する研究運営の手腕が、民博の評価につながったからである。

佐々木先生の研究は、ヒマラヤから日本にいたる壮大な農耕文化論である。一九七一年に『稲

作以前』（日本放送出版協会）を上梓し、縄文時代の西日本に雑穀やイモ類を栽培する農耕文化が存在したと提唱された。これは中尾佐助先生の照葉樹林文化論を発展させたもの。当時、日本列島の農耕は、弥生時代の水田稲作に始まるという説が主流で「異端の学説」と非難された。その数年後から縄文遺跡で穀類が相次いで発掘され、佐々木説は実証されたのである。

照葉樹林文化の「南の道」とともに、北東アジアを起源とする「ナラ林文化」の存在も視野に日本文化重層論を提唱された。これらの研究により、二〇〇四年に「南方熊楠賞」を受賞。その後も名著『稲作以前』の改訂復刊など、日本の基層文化の多重性を描き続け、論集を未完のまま旅立たれたと聞く。まことに無念である。

佐々木先生は「ヤー」と手を挙げて気軽に話しかけられる学者だった。そのお人柄が理系の研究者を巻き込んでアジアを俯瞰する農耕文化論を編みだした源泉だといえる。話を聞いてくれるやさしい人だったが、ときには議論のなかでにわかに語気を強められることもあったので、おっかない先生でもあった。

民博館長退任後、佐々木先生は一九九七年七

月、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構の初代理事長に就任された。アイヌの人びと主体の文化振興とアイヌ文化が日本の文化の多様性と豊かさを知るうえで極めて重要であると提言された。そして二〇〇八年に、アイヌ民族が先住民として国会決議で認められ、現在アイヌ文化復興の拠点として「国立の博物館」の建設が検討されている。

民博訪問を楽しみに、いつも「みんぱくはどないでつか」とこやかに声をかけてくださった。先生からの年賀状に「みんぱくを君に託します」とあった。

佐々木先生、ご遺志をうけとめ、元気な民博にしますので安らかにやすみください。



佐々木高明 第二代館長
（提供・千里文化財団）



ラオスでの朝、仏僧たちは列をなし、路地から路地へとたく鉢にまわる。その列のなかにいた出家時代を、筆者が回想する。規則にもとづいて着るしかない制服だったら、個性をだすために小細工だつてしたくなるものだ。だが、清心、清廉、清貧を求める仏門にあって、僧衣工夫とは。

修行としての僧衣

平井 京之介 民博 研究戦略センター

僧衣を着られるのは僧だけだ。そして僧は僧でいるかぎり僧衣を脱ぐことが禁じられている。ちょっと寒いからセーターを着たりとか、寝る前にパジャマに着替えたりといったことはできない。僧衣を着ることは、僧であることの重要な一部なのだ。

全身をおおうのが至難の業

東南アジア大陸部で一般的な上座部仏教の僧衣は、肌着となるシャツ（上衣）とスカート（下衣）、それに身体全体をおおう一枚の大きな布（大衣）という二つのピースからなる。色はオレンジや黄色、茶色、朱色などだ。

大衣を身体にどう巻き付けるかで、普段用、儀礼用、外出用の三通りの着方がある。難しいのは外出用で、大衣を身体に巻き付けて首から足首まですっぽりと被^{おほ}うのだが、帯などは使わずに、首、左脇の下、左手首といった支点でねじることによって押さえる。新人僧にはこれが至難の業で、僕は最初の一カ月、朝のたく鉢（村中を歩いて施しを受けること）に行くと、寺に戻る前にならず肩や腰のあたりがはだけてしまっていた。

血は特においしいらしかった。

下衣は一枚の筒状の布であり、膝丈のスカートのようなものだ。下着の役目を十分に果たすとはいえない。冬はスースーし、夏は意外と暑い。うっかり裾をパタパタさせると、なかをのぞかれる。僕は見習い僧のいやらしい視線にたえきれなくなり、途中から師匠の許可をえてパンツをはくようにした。

独特の臭い

僧衣には独特の臭いがある。カビのような、きな粉のような臭いだ。吸い込むと、自分のものでさえ確実にむせる。これは僕だけのことではない。質のよくない小さい布をつつて僧衣は作っている。水に濡らすと破れやすく、こまめに洗濯することができない。何日も続けて着ることから、どうしても臭いがつく。臭いの記憶というのは強烈なもので、いまだ



瞑想のポーズをとる修行僧（僕の師匠）

どのように巻こうとも、しょせんは一枚の布である。冬は寒いし、夏は暑い。ただし寒いときは、同系色の毛糸の帽子やカーディガンをつけることが認められている。厳しいのは夏だ。肌の露出を禁じられた僧は、つねに全身をおおっていないなければならない。布の下に熱がこもる。汗でぐっしりになり、とても気持ち悪いが、いつまでも乾かない。そのうえ蚊の攻撃だ。肌が露出した部位だけでなく、布の上から蚊に刺される。僕のを思い出す。

身を包むためだけに

経のなかにこんな一節がある。
僧衣を着ることについてよく考えてみよう。
ただ寒さをしのぐためだけに。
ただ暑さをしのぐためだけに。
アブや蚊、風や日差し、は虫類から身を守るために。
ただ恥ずかしくないよう身を包むためだけに。

僧は毎朝三時半からこの経を読んで、飾り気を排し必要最低限のためだけに衣服を身につけることを確認する。僧衣を着ることがひとつの修行なのだ。



肌着



外出用



たく鉢用鉢



儀礼用

7月

みんなくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■ 14時30分から15時30分

■ 展示観覧料が必要です。

※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんなく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」など、話題や内容は実に多彩。どんでん質問をおよせください。展示場でお待ちしております。

7日

(日曜日)

話者：笹原亮二（国立民族学博物館 教授）
 話題：【新日本の文化展示関連】新しいいれのかたち
 会場：本館展示場（ナビひろば）

14日

(日曜日)

話者：池谷和信（国立民族学博物館 教授）
 話題：【企画展関連】アマゾンの生き物文化
 会場：本館展示場（企画展示場 A）

21日

(日曜日)

話者：齋藤晃（国立民族学博物館 准教授）
 話題：【企画展関連】ボリビア・アマゾンの暮らし
 会場：本館展示場（ナビひろば）

28日

(日曜日)

話者：吉田憲司（国立民族学博物館 教授）
 話題：【企画展関連】平和を築くアート
 ——企画展「武器をアートに」によせて
 会場：本館展示場（ナビひろば、企画展示場 B）

1年間みんなくに何度でも入館できる「みんなくフリーパス(3,000円)」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんなくを楽しむための特典がいっぱいです。

- 特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引
 ◆みんなくミュージアム・ショップとレストランの10%割引
 ◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引 など。
 詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
 (電話06-6877-8893 / 平日9:00 ~ 17:00)

編集後記

企画展「アマゾンの生き物文化」が始まった。鳥の羽根をアレンジした極彩色の装身具には目を奪われるが、サルや猿の頭蓋骨を使った呪具などもかなり衝撃的である。見ごたえある展示である。

アマゾンという名称は、いまや世界的に展開するネット通販の会社名として知られているが、もとはギリシア神話に登場する女ばかりの勇武な騎馬民族の名前であった。古代の歴史家や地理学者は、アマゾン族をギリシア世界の辺境にいる実際の民族と同定しようとしたが、ギリシアの植民地が東へ広がってゆくと同時に、アマゾンがいるとされる地域も小アジアからバルト海の北東部の方へと移っていった。それが南アメリカの大河の名前になった背景にも植民地化の動きがある。スペインのコンキスタドール（征服者）オレラーニャが1542年にこの川を探検中、勇猛果敢な女戦士たちに襲撃された。その報告を聞いたヨーロッパ人たちは「これぞアマゾン」、とギリシア神話の女人族の名前でこの川を呼ぶようになった。「女に負けそうになった」、というよりは「アマゾン族と死を決して戦った」というほうが英雄的に聞こえる。征服者の言説から生まれた名前なのである。（山中由里子）

- 表紙 頭飾り 標本番号：H0103927
 地域：ブラジル 民族：チュカハマイン
 アマゾン川流域に棲息する鳥の羽根を使用している。

次号の予告

特集

ハイブリッドか ちゃんぽんか

月刊みんなく 2013年7月号

第37巻第7号通巻第430号 2013年7月1日発行

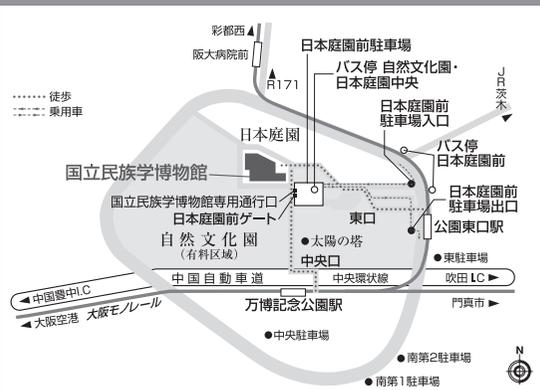
編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
 〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
 電話 06-6876-2151

発行人 八杉桂穂
 編集委員 山中由里子（編集長） 櫻永真佐夫 久保正敏
 庄司博史 菅瀬晶子 丹羽典生 野林厚志
 編集アドバイザー 山内直樹
 デザイン 宮谷一欒
 制作・協力 一般財団法人 千里文化財団
 印刷 日本写真印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
 *本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分（茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください。）
- 自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてください。



みんなくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

